Active Learning Report

巻頭の言

茨城キリスト教大学文学部文化交流学科「アクティブ・ラーニング報告書」2024 年度版をお送りします。

前号の「巻頭の言」には、新型コロナウイルス感染症の拡大によって制限されていた活動をようやく再開できたことが書かれています。しかし、それでも、海外へ渡航しておこなう研修・実習はおこなうことができませんでした。今年度ようやく、海外での研修・実習を 2 つ、再開することができました。この点は、学科主任として大変うれしく思います。本報告書に収められた 2 件の報告（「文化交流体験」と「日本語教育実習」）に詳細が書かれていますが、あらためて、文化交流学科の学びにおいて、実際に海外に行って異文化に触れ、現地の同世代の学生や教職員の方々、現地の人々と交流する体験がいかに重要か、いかに学生を大きく成長させるかを実感しました。世界情勢がますます不安定化するなかで、学生の安全を守ることが第一であることは言うまでもありませんが、今後も可能な限り、海外での研修・実習をおこなっていきたいと思います。

学内や国内各地での、さまざまな学びの機会もきわめて重要です。昨年度に引き続き実施されている授業 4 つの報告を掲載しました。具体的には、日本人等の正規学生と交換留学生がともに多文化理解をめざした活動をする「多文化協働演習」、地域で活躍される方々をお招きして地域の伝統文化の継承やまちづくりについて議論する「地域貢献研究」、日本人等の正規学生と交換留学生がともに外国ルーツ児童生徒への学習支援をおこなう「外国人教育支援演習」、デザインに特化した専用アプリケーションを使用した情報発信の手法を学ぶ「情報デザイン演習」の 4 授業の報告です。

さらに、授業以外では、前期と後期 1 回ずつの学科講演会の報告と、学科ファカルティ・ディベロップメント（FD）の報告が掲載されています。

本報告書には「アクティブ・ラーニング」の定義が記載されておらず、厳密な定義づけがされていないので、教員によって多少の違いがあるかもしませんが、重要な鍵の 1 つは、経験を通じて学生自身による「気づき」を促すことだと考えます。むろん学生たちは日々の授業でさまざまな知識を得、「気づき」を得ます。しかし、ともすれば、それが自分が住んでいる地域の現状や、自分自身のリアルな生活（Life。大げさに言えば「人生」）とどのようにつながっているのか、実感がもてないままになっていないか、非常にもどかしく思うときがあります。学生たちは、ここで報告されている「アクティブ・ラーニング」型授業に参加し、実際にさまざまな経験をし、さまざまな人と交流する（時に、衝突する）ことで、否が応でもリアルな異文化に触れ（これは外国文化に限りません）、自身の価値観の修正を余儀なくされ、ほんの少しですが、リアルな生活～人生が変わる体験をすることでしょう（少なくとも、教員はそれを期待しています）。そういった、生活～人生を変える「気づき」のきっかけを、これからも提供すべく、努力していきたいと思っています。

2025 年 1 月 20 日
文化交流学科主任
中山健一

目　次

巻頭の言葉（文化交流学科主任　中山健一）

Ⅰ　文化交流体験Ａ―韓国（釜山、慶州）＜文化交流体験＞……1

Ⅱ　インドネシア日本語教育実習報告＜日本語教育実習Ａ＞……7

Ⅲ　「多文化協働演習」における文化紹介実施について
＜多文化協働演習＞……13

Ⅳ　2024 年度後期「地域貢献研究」授業報告＜地域貢献研究＞……17

Ⅴ　学校で孤立する外国ルーツの子どもたちを助けたい！
＜外国人教育支援演習Ⅰ～Ⅳ＞……21

Ⅵ　「情報デザイン演習」とコラボレーション＜情報デザイン演習＞……25

Ⅶ　学科講演会報告（前期・後期）……29

Ⅷ　FD 報告書……35

Ⅰ　文化交流体験Ａ―韓国（釜山、慶州）

＜文化交流体験＞

文化交流体験A―韓国（釜山、慶州）―

◆文化交流体験とは？◆

文化交流学科では、世界各国の歴史や文化を体感するとともに、現地の人々との交流を深めることを目的とした様々な授業を展開しています。そのひとつが「文化交流体験」です。この授業は、学生たち異文化交流を体験する科目として、2007 年より開講されています。「文化交流体験」は学科カリキュラムの基幹科目に該当し、1 年次生から履修が可能です。受講生は、1 週間程度の現地実習への参加に加え、7 コマ程度分の事前授業、および事後のレポート提出が義務づけられます。事前授業では、学生たちが訪問地域の歴史や文化、言語などを調査して発表します。また、現地では地元の大学生たちとの交流会を開催します。また、交流会のほかにも現地の日本語科の講義に参加し、外国における日本語教育の現場を体験します。このような交流を通して、教科書には記載されていない現地の生の情報に触れることで、当該地域に対する理解を深めます。実際に、交流会をきっかけに海外の友人を作る学生が多いようです。

文化交流学科の教員は、様々な学問領域の専門家から構成されています。研究対象地域も多様です。そのため「文化交流体験」の実施地域も多岐にわたります。これまでの訪問先は次のとおりです。タイ・カンボジア（2007 年度）、タイ・カンボジア（2008 年度）、ラトビア・ドイツ（2009 年度）、ベトナム・カンボジア（2010 年度）、スリランカ・香港（2011 年度）、カンボジア・ベトナム（2012 年度）、キルギス・ウズベクスタン（2013 年度）、タイ・ミャンマー（2014 年度）、台湾（2014 年度）、フィンランド・トルコ（2015 年度）。中国雲南省デチェン・チベット族自治州（2016 年度：参加希望者が少数であったため授業は中止。学生および教員の有志が自主的に現地を訪問）、フィンランド・エストニア（2017 年度）、沖縄与論島（2023 年度：参加希望者が少数であったため中止）、韓国釜山、慶州（2024 年度）。

◆2024 年度文化交流体験 A の概要◆

2024 年度の文化交流体験 A は、韓国の南部地域にある釜山・慶州をめぐる旅としました。また訪問校としては、提携校である新羅大学校に加え、新しく包括協定を取り結ぶ東義大学校を選定しました。担当教員は、文化交流学科所属教員の宮﨑晶子（地域国際センター長）と藤野真挙とし、現地での交渉は一部、帰省中の鄭敬珍（文化交流学科教員）の協力を受けた。

・訪問先：韓国（釜山、慶州）
・日程：2024 年 9 月 8 日～13 日
・参加者：教員 2 名、学生 20 名

【授業の目的】
1、韓国文化についての学習
日本の隣国である韓国は、地理的関係からも歴史的・文化的に深い関係にあります。東アジア文化圏に位置する両国の文化について、類似点や相違点を学びます。

2、現地の大学生との交流会の実践
現地の大学の日本関連学科の学生と交流会を実施し、直接的な会話コミュニケーションをとることで、メディアなどの間接的な媒体からは見えづらい、異なる国の同世代の若者の感性や価値観、問題意識などを学びます。

3、文化遺産探訪
韓国の慶州は、世界遺産の石窟庵に代表されるように、韓国随一の史蹟・文化財が残されている地域です。石窟庵をはじめ仏国寺・天馬陵・東宮・国立博物館を探訪し、慶州の町並を散策することで、韓国の歴史と日本とのつながりを学びます。

【参加者】
引率者　　宮﨑晶子　藤野真挙
参加学生　菅沼仁美　安齋里織　エデュランアイコ　大内茉実　大槻奈央　大畑陽菜乃
大森美咲　菊池遥菜　古目谷悠之介　作山侑紀　櫻井蓮　佐藤凛々　芝沼里菜
照山采音　室井香凛　木澤実夏　佐川海歩　飛田有希乃　日渡朱音　山本雄斗

【日程】

1、事前授業

①6 月 15 日(土)3限～4限

◇講義:鄭敬珍정경진 先生(文化交流学科教員)から学ぶ、韓国の社会と文化

◇学生のグループおよびテーマ設定

◇諸連絡(日程の決定、パスポートの申請方法など)

②7 月 8 日(土)3限～5限

◇学生グループによる発表

キムチチーム　:釜山の歴史・文化・観光

トッポギチーム:釜山の食文化

チヂミチーム　:慶州の歴史・文化・観光

ビビンパチーム:韓国語

プルコギチーム:韓国の学生文化

◇JTB 担当者宮内優真さんによる、旅券発行などの手続き

③8 月 31 日(土)3限～4限

◇講義:藤野真挙(文化交流学科教員・現地居住経験者)による現地での注意事項について

◇諸連絡(当日の持ち物確認など)

【巡検ルート】

○左図:韓国における釜山の位置。
　釜山は韓国南東部に位置する都市。
○右図:巡検地域、釜山および慶州。

(google map より作成)

【日程表】

9 月 8 日(日)	成田空港発　14:00	
	金海空港着　16:35	電車
	電車でホテルまで移動	アスティ―ホテル釜山
9月 9 日(月)	ホテルフロント集合　8:20	
	東義大学校(図書館案内)　10:00 日本学科 1 年生の授業に参加　11:00	電車＆貸し切りバス
	東義大学校の学生と釜山見学 12:30 レストラン集合　17:30	
	バスでホテルまで移動	アスティ―ホテル釜山
9 月 10 日(火)	ホテルフロント集合 8:20 慶州(歴史・文化遺産見学)へ	貸し切りバス
	バスでホテルまで移動	アスティ―ホテル釜山
9 月 11 日(水)	午前中自由行動	
	ホテル発　11:00 新羅大学校着　12:10	貸し切りバス
	12:30-14:20 Aグループ　日本語音声学(講義参加)	5 グループを A・B に分割
	14:30-16:20 Bグループ　日本語作文(講義参加)	
	バスでレストランのある地域へ(西面) 電車でホテルまで移動	アスティ―ホテル釜山
9 月 12 日(木)	自由行動(釜山市内)　～20:00	アスティ―ホテル釜山
9 月 13 日(金)	ホテル出発　7:30 金海空港発　11:00　成田空港着　14:00	貸し切りバス

【最終レポートの提出】

・テーマ:文化交流体験を通して感じたこと
　考えたこと
・分量:1500 字程度
・提出締切:2024 年 9 月 30 日

◆引率教員のことば◆

海外の制度や政治についての知識を得たり、商業的な文化コンテンツで楽しんだりすることは、必ずしも現地に行かなくても経験できることである。しかし、そのような社会にどのような感情をもった人が住み、どのような日常を過ごしているのかということは、やはり現地のその場所で、その人に会う／出くわすことを通してしか、本当には知りえないことである。情報機器の発達によって人に会わなくとも効率的にビジネスができるようになった社会は、むしろ、それ以外の場における、会う／出くわすことの価値を高めているのでないだろうか。そう思ったのは、文化交流体験から帰国した学生たちのレポートの焦点が、ほとんど一様に、韓国人の「情」について知った、というところに当てられていたからである。

長く韓国で現地の人と交流してきた私自身も、今回の引率では改めてそうした「情」を感じた。特に、東義大で実施した交流会に参加してくれた韓国人学生の有志が、翌日以降の我々の日程に同行して学生たちと交流を続け、最終日には、早朝にもかかわらず空港まで見送りに来てくれたのは象徴的な出来事で、心からありがたかった。私たちからお願いしたのでなく、あちらから申し出てくれたことであり、おかげさまで、文化交流体験という実地交流の効果が、当初の想定以上に高まった。

9月9日の東義大との交流会当日、大学に到着したのはいいものの、これからどんな経験をさせられるのか、交流会などといってもちゃんと話せるのかと、教員・学生ともに緊張の面持ちだった。しかし、迎え入れてくれた韓国人学生の熱「情」が、そうした緊張を一気に溶かしてくれた。会場で交流会の開始を宣言した直後に、私たち教員の目の前に現れたのは、緊張などまるで最初からなかったかのように、互いの趣味や自身のことを語り合い、他者のそれを受け入れその場を楽しむ学生たちの姿だった。参加学生のなかには、今日ここではじめて自分が解放されたとまで語った者もいたほどだ。まずは無条件に歓迎して心を開いて受け入れるという、韓国の方々の懐の深さを感じた。結局、この交流会は、画面越しの映像をイヤホンで視聴していては決して経験できない、身体で感じる熱気とエネルギーで充満した場を作りあげ、終わったあとには、まるで推しのライブを見に行った後のような、すがすがしい余韻を残すものとなった。

「せっかく来てくれた日本人とは長く交流していたいし、それは、自分にとっても楽しい」（東義大4年ハンスンス談）という、その場をともにした人と、ともにその場を楽しもうとするのは、韓国人の歓待の「情」であるそうだ。これは、自分が我慢してでも客を楽しませることを尊ぶ日本人のおもてなしとは、少し異なる考え方かもしれない。だが今後、日本社会が多文化共生社会という未来へと進んでいくにあたっては、韓国人の「情」は、その社会に作られる壁を突破する一つのヒントになるのかもしれない。願わくは、今回の文化交流体験に参加した学生たちには、あの日、私たちの緊張を一瞬で解いてくれた彼ら／彼女らの熱「情」を覚えておいてもらいたい。ほんの数日だけの体験であれ、マイノリティとしての不安を解消してくれた、あの笑顔と行動を。

【追記】

9月8日、地下鉄ササン駅で出くわした、スーツケースが改札から出せずに狼狽する私たちを爽やかに助けてくれた男性に、心から感謝の意を表します。

（記：藤野真挙）

Ⅱ　インドネシア日本語教育実習報告
＜日本語教育実習 A ＞

インドネシア日本語教育実習報告

中山健一（「日本語教育実習 A」担当）

本報告は、文学部「日本語教員」資格科目（主専攻）の必修科目「日本語教育実習 A」の実習のうち、本学協定校であるインドネシア リアウ大学での実習の報告である。

＜日程・参加学生・内容＞

日程：2024 年 8 月 31 日～9 月 9 日

参加学生：「日本語教育実習 A」履修者 5 人のうち 4 人（いずれも文化交流学科）

実習先：リアウ大学教育学部日本語教育学科（インドネシア リアウ州プカンパル）

8 月 31 日（土） 羽田⇒ジャカルタ	夜、羽田空港第 2 ターミナル集合、出国手続き ガルーダ GA9351　羽田発　＜機内泊＞
9 月 1 日（日） ジャカルタ ⇒プカンバル	ジャカルタ着　入国審査、両替、国内線乗り継ぎ ガルーダ GA176　ジャカルタ発⇒プカンバル着 リアウ大学の方と合流、歓迎の食事会、ホテルチェックイン
9 月 2 日（月） プカンバル	リアウ大学到着、教育学部正副部長らと会談、日本語教育学科の教職員・チューター学生との顔合わせ、オリエンテーション 授業担当の先生と実習学生との打ち合わせ
9 月 3 日（火） プカンバル	授業見学、授業補助、全体ミーティング 文化交流会の準備、会場設営
9 月 4 日（水） プカンバル	文化交流会 (1)講演（本学担当教員） (2)日本文化紹介発表（本学実習学生） (3)インドネシア文化紹介発表（リアウ大学学生） 全体ミーティング
9 月 5 日（木） プカンバル	教壇実習の準備、教案や教具の作成、本学担当教員の個別指導 準備終了後、リアウ大学学生とともに自由行動
9 月 6 日（金） プカンバル	教壇実習の実施、教壇実習の振り返り 教育学部正副部長らと会談
9 月 7 日（土） プカンバル	リアウ州観光（自然、仏教遺跡、モスクなど）、懇親会 現地の「マラユ文化」フェスティバル見学
9 月 8 日（日） プカンバル ⇒ジャカルタ	ホテルチェックアウト、おみやげ購入 ガルーダ GA179　プカンバル発⇒ジャカルタ着 出国手続き、国際線乗り継ぎ ガルーダ GA874　ジャカルタ発　＜機内泊＞
9 月 9 日（月） ジャカルタ⇒羽田	朝、羽田空港に到着、帰国手続き、解散

「文化交流会」について、日本語教育学科以外の学生も大勢参加し、参加者は数百人に及んだ。茨城キリスト教大学側から、担当教員による短い講演（言語学にかんする内容）、実習学生による茨城キリスト教大学の紹介、日本の伝統的な遊びの紹介（あやとりと福笑い）をおこなった。リアウ大学の学生からは、インドネシアおよび地域の伝統的な踊り、歌、遊びの紹介があった。当日の様子は、地元の地方紙「RIAU POS」2024 年 9 月 19 日オンライン版にも記事として掲載された[1]。

「実習」について、リアウ大学の授業担当の先生との打ち合わせ、授業見学、授業補助、教案や教具の作成、担当教員による個別指導、各自練習をへて、本番となる教壇実習がおこなわれた。それぞれ「まるごと 入門」または「まるごと　初中級」（国際交流基金）の課の一部を導入、練習した。技術面では拙い点もあったが、リアウ大学学生の反応もよく、当初の実習の到達目標はおおむね達成された。

＜謝辞＞

実習の実施にあたり、今回含め毎回、詳細な調整・アレンジをご担当くださり、本学学生のカルチャーショックやとまどいにもきめ細かく対応してくださる、リアウ大学日本語教育学科の Dini 先生をはじめ、学科長の Meri 先生、教壇実習の授業担当としてご指導くださった Aya 先生、Wiwid 先生、ほか学科教職員の皆さま、実習をご理解・ご支援くださった Jimmi Copriady 教育学部長、ほかすべてのお名前を記すことはできないが、リアウ大学の教職員の方々には大変お世話になった。ありがとうございました。そして、本学学生を友人として受け入れ、親切に接してくれたリアウ大学の学生たちに心から感謝したい。

また、この実習の参加学生は、茨城キリスト教学園グローバル教育支援金の支給を受けている。記して感謝申し上げる。

最後に。実習が成功裏に終われたのは、上述したリアウ大学の教職員・学生、本学関係者の尽力・協力のおかげなのだが、もう 1 つ、実習学生一人一人が、素直な態度で異国の相手のことを知ろうとし、友人として対等な人間関係を構築しようとしていたことが非常に大きかったように思う。それは、文化交流会・教壇実習の内容、彼らの話しぶり、相手との接し方、その場の雰囲気からも明らかだった。ともすれば「日本語教育実習」は、無意識に「相手に日本語を教えてあげる」という非対等の立場に陥ってしまいがちであるが、そういったことは微塵もなかった。参加した本学の実習学生に、感謝したい。

＜参加学生の感想文と写真＞

リアウ大学での経験は私にとって他文化だけでなく自文化についても考えさせられる貴重なものでした。

インドネシアではリアウ大学の学生をはじめとして友達がたくさんできました。みんなインドネシアの文化や風土について教えてくれて、それと同時に日本の文化についてもよく質問をしてくれました。その時に私は自分が日本の文化や日本についてわからないことが多いことに気がつきました。

[1] https://riaupos.jawapos.com/pekanbaru/2255056269/tingkatkan-wawasan-dengan-pertukaran-budaya-indonesia-jepang

教育実習と文化交流を目的に行ったインドネシアでしたが、インドネシアの文化だけでなく日本の文化についても目を向ける機会になりました。自分が外国人として過ごす経験もできました。

リアウでの 1 週間は私にとって大きな経験で、これからの人生にも影響するような出来事でした。日本語教育に関わる上でも今回感じたことや出会いを大切にしていきたいと思います。

〜〜〜

り、素晴らしい異文化交流ができたように感じる。

リアウ大学へ行って印象的だったことは、学生や先生が皆非常に友好的だったことだ。特にリアウ大学の学生たちは、私達を見ると手を振ってくれたり、積極的に日本語で話しかけに来てくれたりした。お昼休みや放課後も、学校にいる間は常に学生の誰かが一緒にいてくれてたくさん話をしてくれた。

チューターとして手助けをしてくれた 4 人の日本語能力はとても高く、学校での生活のサポートの他に普通の友達と話すような他愛もない会話や雑談も日本語でしてくれた。チューターの子のうちの一人に「どうやって日本語を勉強したの？」と聞くと、「もともとそんなに上手じゃなかったけど、チューターになるって決まってからネイティブと実際に会話ができるアプリでたくさん勉強した。友達みたいに話せる相手がいたほうが日本人の子も楽しいし安心するだろうから。」と返ってきた。もともとの日本語の勉強に加え、私達のためにさらに頑張って勉強してくれていたことがとても嬉しかった。

インドネシアと日本それぞれの文化を紹介しあう「文化交流会」では、インドネシアの伝統的な踊りや歌を披露してくれたり、インドネシアの遊びを体験させてくれた。私たちもあやとりや福笑いを紹介して体験してもらったが、みんなすごく楽しんでくれて学生たちの素直な人柄を実感した。

教壇実習の授業でも、みんなの積極的な発言やその人柄に助けられ、緊張せずに授業を行うことができた。

今回のインドネシア実習では、みんなが日本人と関わろうとしてくれる友好的な空気が、楽しかったと感じられた最大の要因であったと思う。たった一週間しかいられなかったが、リアウ大学の人々やインドネシアが大好きになれた日本語教育実習だった。

〜〜

インドネシアへ実習に行き、印象に残った点が 3 つある。

1 つ目は、非常に歓迎された点である。リアウ大学の日本語教育学科へ実習に行ったが、現地の学生にとっては、日本語は勉強したことあるけど日本人にあったことない人ばかりだったので多くの方々から話しかけてもらえた。リアウ大学にいる間は、先生をはじめ学生の皆様に非常にお世話になった。（SNS のアカウントのフォロワーが 100 人ほど増えた。）

2 つ目は、辛さ・甘さの基準が違うという点である。食べ物に関しては sambal と呼ばれる辛いチリソースを毎回使っていたという点に驚き、飲み物に関してはホテルのブラックコーヒーが非常に甘かったことに衝撃を受けた。国ごとでの「当たり前」は違うということを実感した瞬間であった。

3 つ目は、日本人に謎のステレオタイプがあったことである。現地である学生から「日本人って足腰強いんでしょ？」と言われた。というのも、インドネシアではバイクが基本的な移動手段であり、あまり歩きたくないらしい。その学生いわく、50m 先でもバイクがあれば乗りたいとのことであった。非常に面白い発見で、日本人というものを第三者の目線で見る良い機会となった。

新発見ばかりの良い実習であった。

リアウ大学の先生方とともに

キャンパスの建物

文化交流会の様子

教壇実習の様子①

教壇実習の様子②

Ⅲ　「多文化協働演習」における文化紹介実施について

＜多文化協働演習＞

「多文化協働演習」における文化紹介実施について

授業担当者：宮﨑晶子、鈴木晋介

本授業は、異なる文化的背景を持つ留学生とともに日本人学生が「協働」し、そのスキルを修得することを目的として設置された。今年度は、国田義務教育学校（@本学 1 号館 5 階)、かしま子ども大学（@本学 11 号館ラウンジ)、大甕小学校（@大甕小学校体育館）の児童生徒（約 70 名）に対し、留学生たちの母国の文化を紹介した。

当日は、各国（韓国、ベトナム、インドネシア、イタリア、アメリカ）のブースが設けられ、児童生徒が海外旅行気分でそれらのブースをめぐり、文化を学ぶという形で実施された。児童生徒はパスポート型のノート（以下 IC パスポート）を携帯し、各国ブースを出入りする際には出入国スタンプを押してもらい、文化紹介で学んだことを IC パスポートに書き込んだ。

児童生徒たちからは「インドネシア知らなかった！」「韓国かわいい！」「ベトナムのご飯おいしそう！」「イタリアの世界遺産いっぱいある！覚えられない。」「アメリカ大きい！」などさまざまな感想が寄せられ、インターネットや TV などのメディアを介すことなく留学生と対面で接し、「生きた」異文化理解の場となった。

今後も茨城県県北地域において異文化理解の機会を提供するとともに、日本人学生と留学生が協働し、一つのロールモデルとなるような関係性を築いていきたい。

留学生と韓国文化の紹介をして
유학생과 한국 문화를 소개하고

私達は、留学生と共に韓国について文化紹介を計３回行った。この文化紹介では、韓国の基本的な情報、食文化、伝統的な衣装、学園祭について、観光名所を説明した。今回プレゼンテーションを作る上で韓国について様々なことを調べ、私達が知らない韓国の魅力についてたくさん知ることができた。また、子供達にプレゼンをするため、わかりやすい言葉、聞きやすい音量などをグループ内で試行錯誤して取り組んだ。

・韓国の伝統衣装の韓服を着ることができ、貴重な体験ができた。子どもたちに教える機会も数少ないので楽しかった。また、韓国の食文化について深く学ぶことができ、理解を深められた。(吉田)
・多文化を知ること、小中学生や留学生と関わることがあまりないので、全過程を通して貴重な経験ができたことが嬉しい。小中学生の話を聞いてくれる姿勢や大きなリアクションのおかげで、達成感を感じることができた。(仙波)

・この授業を通して、留学生との交流を深めることができ、韓国の様々な魅力について理解した。また、小中学生にプレゼンするため、声色や喋り方などをみんな工夫できたのがよかったと思う。(照沼)
・改めて自国の文化について詳しく知れて面白いと感じた。また、発表を聴きに来てくれた方々が韓国語で話しかけてくれたときは嬉しかった。日本と韓国は近い国なので、違いがあまりないと思っていたが、違う点を発表したときに驚き、新しく知ったと言ってくれて嬉しかった。(ヨナ)

(仙波優、照沼音羽、吉田夏生、ヨナ)

日本の子供たちとつながるベトナムの心
Nhật bản và Việt Nam - Kết nối yêu thương

この活動を通じて、ベトナムの文化や日常生活を伝えるとともに、異文化交流を深める貴重な経験を得ることができた。それぞれの発表の内容や子供たちの反応について報告する。

最初の発表では、ベトナムの地理や歴史、伝統的な服「アオザイ」や料理「フォー」など、基本的な情報や写真を使い、紹介した。小学生達は、アオザイの美しいデザインやフォーの見た目に興味を示し、「アオザイはどう作られるのか」などの質問を通じて関心を深めた。

２回目では、「テト（旧正月)」と「中秋節」を中心に、日本の正月やお月見と比較しながら紹介した。特に、中秋節のランタンを持って歩く伝統について話すと、子どもたちはとても興味を示し、発表の後に日本とベトナムのお祭りを比較する活発なディスカッションが行われた。

３回目では、ベトナムの子どもたちの日常生活を写真や動画で紹介した。学校生活や通学方法の違いに驚きながらも興味を持ち、「給食では何を食べるのか」といった質問が多く寄せられ、交流がさらに深まったと思う。

これらの活動を通じて、ベトナムの文化を分かりやすく伝え、日本の子どもたちの視点から自国文化を考え直すきっかけを作ることができたと考えている。今後もベトナムと日本をつなぐ架け橋として、このような活動を続けていきたいと考えている。

(森川寛仁、ゴックアィン、ミンハン、キムガン、ニュゴック、トゥアン)

インドネシア文化の多様性の世界
Buana keanekaragaman budaya Indonesia

私たちインドネシアチームは、３回のアクティブ・ラーニングを通し、インドネシアの文化的魅力を再認識することができた。子どもたちに発表することは初めての経験で、留学生と協働し、子どもたちのリアクションや、伝わりやすいようなしゃべり方など、試行錯誤することは留学生も含めとてもいい経験となった。

・今までのプレゼンテーションにおいて、子供たちに対して自国の文化を伝え、学んでもらうことは、私にとってとても気持ちのいいものでした。(ファルハン)
・留学生と協働することで、新たな価値観や、リアリティーのある文化や生活
を知ることができ、私にとってとても充実した経験をした。(亀山)
・私はこの発表を通して、子供たちの新しい視点によって、インドネシアの文化的魅力を再認識することができた。(渡辺)
・インドネシアの島の数や、伝統料理などを教えた際、子供たちの驚く顔を見て、発表のやりがいを改めて感じることができた。(竹村)

(ファルハン、亀山隆太郎、渡辺大和、竹村元希)

イタリアの多彩な魅力
Le bellezze dell'Italia

・多くの人の前で発表することは、自分を成長させる経験です。日本語学習者としての視点から見ると、日本語で発表し、上達するのにいい体験でした。子供たちはとても優しくて、喜んでいたので、忘れられない機会になりました。(アンドレア)

・留学生との交流は自分自身を成長する経験となり、子供たちとの交流もとても身になるものでした。また、留学生と協力しながら資料を作ることで、自分では気づけなかったイタリアの魅力に気づくだけでなく、プレゼン力もつけられたのでとてもよい機会になりました。(豊作)

・今回の発表で、留学生と交流する事で自分にとって新たな経験になりました。留学生と接することで異なる文化や価値観を学ぶことができました。また自分と異なる価値観や視点に触れることで、自分の意見を相手に伝える事や相手の考え方を尊重することが大切だと改めて気づけた。(河村)

アクティブ・ラーニングを通して、普段僕たちの学科ではかかわりの少ない、留学生と交流することができ、その中で留学生としてではなく一人の友人として協力して発表することができて、貴重な体験をさせていただいたと思います。また、様々な文化を調べ実際の体験や経験をネイティブである留学生に聞いて、「お話」としてではなく友人の経験として受け取ることができて、多文化をより身近に感じることができました。(小林)

(トロンチ アンドレア、河村昊、小林暖大、豊作颯大)

Ⅳ　2024 年度後期「地域貢献研究」授業報告

＜地域貢献研究＞

2024年度後期「地域貢献研究」授業報告

岩間信之・清水博之

はじめに

「地域貢献」は、「多文化協働」や「日本語教育」とともに、文化交流学科における学修の3つの柱の1つである。

「地域貢献」に関連する授業には、茨城県北地域を対象として地理学、民俗学、歴史学の視点から学際的に考察する「ひたち学」、故郷を学び・支える重要性を体験的に学修する「地域貢献研究」、自分の故郷とほかの地方の文化を比較検討することによって、自らの文化をより明確に自覚して理解できるようになることをめざす「地域貢献演習Ⅰ・Ⅱ」などがある。

1．授業概要

「地域貢献研究」では、自分自身で「故郷」を学び・支える重要性を体験的に学修する。担当教員から郷土学の基礎的な考え方を学びつつ、現在も茨城県の内外で各分野にわたって活躍しているゲストスピーカーを招聘し、「地域の伝統文化の継承」や「街づくり活動」の現状と課題について事例紹介をしていただく。そして、参加者全員でテーマについての討論を重ねる。毎回の授業後にはリアクションペーパーを課している。

この授業は、次の3つの内容によって構成している。

(1) 自分が「故郷」を持つ意味や、自ら「故郷」を見い出して、それを支えていくことの重要性を講話する（担当教員 2名）。

(2)「伝統文化の継承」や「地域活性化事業」の具体的な事例紹介と演習形式による討論をする（ゲストスピーカー 9名）。

(3) フィールドワークによって、地域貢献の現状を現地で観察し体感する（担当教員 2名）。

2．授業日程

※ 敬称略

No.	月	日	曜	種 別	テーマ	講 師	
						所 属	氏 名
1	9	24	火	解 説	オリエンテーション	本学教員	岩間 信之 清水 博之
2	10	1	火	講 話	地方都市の現状と地域貢献の重要性	本学教員	岩間 信之
3	10	8	火	講 話	記録という仕事 〔「日立鉱山」の終焉を撮影したカメラマン〕	プロカメラマン 「大みかの杜スタジオ」オーナー	中井川 俊洋
4	10	15	火	巡 検 （学外授業）	㈱日立製作所 日立オリジンパーク 小平記念館	本学教員	岩間 信之 清水 博之

5	10	22	火	講 話	自分が主役のまちづくり 〔「日立を愛した男」の歩み〕	㈱山森・㈱山森不動産 会長	森　秀男
6	10	29	火	講 話	「祭り・行事」から見た 地域貢献の意義	本学教員	清水 博之
7	11	12	火	講 話	ユネスコ無形文化遺産 「日立風流物」の保存・継承を担う	日立郷土芸能保存会 会長 〔スペシャルゲスト〕 茨城大学大学院 応用理工学野情報科学領域 講　師 院　生 学部生	水庭 久勝 柴田　傑 片岡 隼太郎 望月　澪
8	11	19	火	巡 検 (学外授業)	密筑（みつき）の里の浄泉	本学教員	岩間 信之 清水 博之
9	11	26	火	講 話	わかもののまちづくり	東海村地域戦略課	松﨑 真吾
10	12	3	火	講 話	夢を実現する ーマコレレの歩みー 〔ウクレレ・ビルダー〕	ウクレレ工房 マコレレハンドクラフト 代表	平野　誠
11	12	10			街づくりの新たな潮流	タウンマネージャー	梶岡 誠生
12	12	17			保証協会というお仕事	茨城県保証協会	打越 美帆
13	1	7	火	巡 検 (学外授業)	ミカボシノカガセオと 宿魂石	本学教員	岩間 信之 清水 博之
14	1	14		講話	ダイアモンドシティ小美玉	小美玉市企画調整課	清水 弘司
15	1	21	火	総括	まとめ	本学教員	岩間 信之 清水 博之

３．履修生のリアクションペーパー（抜粋）

片岡隼太郎さん、柴田 傑さん、望月 澪さん

・私は、「伝承」とは形を守りながら下の世代に伝えていくという少しやんわりしたことだと思っていた。しかし、そのやんわりとしたことを現実にするためには、工学などの先進技術の力を借り、伝統的なものやその「伝承」を身近なものにしていくという手もあるのだと知った。これについて、清水先生からは、形を変えることについて賛否はあるが、伝えたいという気持ちが大切だというお話があった。岩間先生からは、元々の形とそこから形を変えたものは同じ価値なのかというお話があった。茨城大学工学部の先生からは、伝統を蔑ろにしないように技術を活用するということを意識しているというお話があった。私は、工学について全く分からないこともあり、初めは伝承のためとはいっても形を変えることに少し違和感を感じてしまった。しかし、3 人の先生のお話を聞いて、全く伝承できずにそれ自体が無くなってしまうこ

とよりは「気持ち」を通して歴史などとともに「伝承」していくことが今現在最も有効的なのではないかと考えた。清水先生からは、それほど伝承が難しくなっている今、これからどうしていくかは自分たちが選択していくことだというお話があり、今後はそれを考えながら生きていかなければならないと思った。〔11/12　森作 和叶〕

平野　誠さん

・衝動的に買ったひとつのウクレレから人生がこんなに動かされるとは思っていなかったのでとても驚いた。私も楽器を触ったことがある身なので楽器職人という職業にとても興味を持っていたが、売れない時期があるという点や、制作に長い時間が必要になるという点に改めて気づき、楽器を作ることは精神的にも肉体的にもとても大変なことなのだということに改めて気付かされた。また、やりたいことはいつ始めても良いのだということを大いに実感した。平野さんは脱サラをしてウクレレ職人になったとおっしゃっていたが、私は就いた職業を変えて新しいことをするということに恐怖心や不安感を強く感じていた。しかし今回のスピーチを聞いて、やりたいと思ったことを始めるのはいつであっても遅くは無いということを強く実感することができた。平野さんのウクレレに対する思いにも強く感動した。できるできないは置いておいて、自分がやりたいと思ったことにはどんどん挑戦して、「人生の相棒」と呼べるくらい不可欠なものに出会いたいと思う。〔12/3　鈴木 萌〕

・梶岡さんのお話を聞き、起業という言葉が私達の若い世代にもより身近に感じるようになりました。実際に開業している人たちが、美容やヘルスケア、医療、福祉など様々な面で地元を賑わせようとしていることを学び、将来起業を少しでも考えたときに役に立つ良い体験をさせていただきました。宿泊業は開業率が高いので良いと思いましたが、その分廃業率も高いことは知らなかったので、起業する時もどんな業種につくべきかを自分で考え、行動に移せるように準備を重ねることが大切だと思いました。〔12/10　長谷川 愛唯〕

・私は、今ある日立の観光資源をどうにかして魅力的に見せようと現在まで考えてきました。しかし、今回の講義を受講して、そもそも誰のニーズにも合わない古いものを推しても、人々がそれを求めていないため、人を引き付けるのは厳しいのではないかと考えました。日立に住む我々が具体的に何に不満があるのか、どのような施設、サービスなどがあればお金を落とそうと思えるのか、これからの大学生活を通して考えていきたいです。

〔12/10　山本 雄斗〕

清水 弘司さん

・自分の住む地元が茨城町で小美玉市の近くということもあり元々親近感を持っていたが、今回の講義を聞くうちに、小美玉市を広めようとする方々の熱い思いや小美玉市ならではの PV 製作、オリジナル商品であるダイヤモンブラン開発など自分の知らない小美玉市の魅力を知ることができた。また、1 つの市や町を活性化させようと取り組む姿勢の素晴らしさを学ぶことができた。〔1/14　檜山 諒〕

Ⅴ　学校で孤立する外国ルーツの子どもたちを助けたい！

＜外国人教育支援演習Ⅰ～Ⅳ＞

学校で孤立する外国ルーツの子どもたちを助けたい！

〈外国人教育支援演習Ⅰ～Ⅳ〉

岩間信之　鈴木晋介

1.IC with Uプロジェクト

在留外国人数が増加し、また優れた外国人材の必要性が高まるなか、多様性・包括性のある社会の実現を目指す多文化共生の推進は、我が国の重要な社会課題となっている。全国スケールで見た場合、在留外国人の大半は外国人散在地域（外国籍の住民がコミュニティを形成せず、分散して暮らしている地域）で暮らしている。外国人散在地域は、いわゆる「外国人の顔の見えない定住化」[1)]が顕著であることから、多文化共生社会を実現させる上で多くの課題を残している。なかでも、近年増加している外国にルーツのある子どもたちへの対応は、大きな課題である。日立市のような散在地域は、外国にルーツのある子育て世帯が相対的に少なく、かつ分散して暮らしている。そのため、こうした子どもたちへの支援は、外国人集住地域より難しい状況にある。

こうしたなか、茨城キリスト教大は、2021 年より「IC with U プロジェクト」を進めている[2)]。プロジェクトは、①学習支援（外国にルーツのある子どもたちへの日本語学習や教科学習支援）②地域への理解・浸透（異文化理解への素地づくり）③人材育成（多文化協働クリエイターの育成）で構成される。「外国人教育支援演習Ⅰ～Ⅳ」は上記①に該当するほか、③の講座認定科目にもなっている。

2.「外国人教育支援演習Ⅰ～Ⅳ」の概要

この演習では、日本人学生と留学生がチームを組み、日本語レベル初級程度の外国人児童・園児や高校の留学生に対し、毎週指定された時間に、日本語学習支援・学習支援（宿題のサポートなど）を行っている。「外国人教育支援演習I・II」（3 年生向け）と「外国人教育支援演習III・IV」（4 年生向け）を同時に走らせ、教育支援演習 2 年目の先輩（昨年度I・IIを履修し、今年度III・IVを履修）と教育支援演習 1 年目の後輩（今年度I・IIを履修）がチームを組むことで、支援のノウハウが継承される仕組みである。

この演習は外国ルーツの子どもたちと直に触れあう内容であるため、履修学生を日本語教師や小・中学校教諭を目指す大学生、交換留学生などに制限している。具体的な履修条件は次の通りである。1）「日本語教育実習」履修中の学生、2）特別支援課程の履修を許可された学生、3）日本語検定 2 級以上の留学生。

本年度は、履修学生 18 名で，7 名の子どもたちを支援している。具体的な内容は下記の 4 つである。

①上級コース：（ICH 帰国子女）　支援日：毎週水曜日 17：00～18：00

支援対象：ICH2 年生の帰国子女。英語が堪能で日本語力は日常生活レベル。

支援内容：日本語（文法＆読み書き）の徹底。

担当学生：大学 4 年生 2 名、3 年生 1 名、留学生 2 名

②中級コース：（近隣の児童・園児）　支援日：毎週水曜日 16：00～17：00

支援対象：

・認定こども園みらい園（年長）の男の子 1 名、および近隣小学校 1 年生の女の子 2 名（異なる学校)。いずれも中国籍。
・園児 1 名と小学生 1 名は日本生まれであり、日常の日本語力は問題なし。ただし家庭で日本語を使わないため、国語や作文が苦手。
・もう一人の小学生は幼稚園卒業まで中国の祖父母のもとで育ち、半年前に来日。日本語が苦手であり、学校では孤立ぎみ。
・岩間は子どもたちのご家族と面識があり、普段から連絡を取り合っている。子どもたちの送迎はご家族が担当。いずれも将来的に大学進学を希望。

支援内容：国語の初級教材を使った学習、作文、日本語ゲーム

担当学生：大学 4 年生 4 名、留学生 2 名

③初級コース：（近隣高校の留学生）　支援日：毎週水曜日 16：00～17:00

支援対象：ICH（タイ人女性、ドイツ人女性)、日立一高（ドイツ人男性）
支援内容：日本語の初級的な内容の学習、および国際交流

担当学生：大学 4 年生 1 名、3 年生 2 名、留学生 2 名

④オンラインコース：

・筑波大学と茨城県国際交流協会が進めるオンライン日本語支援プログラム．県内各地の中学校をリモートでつなぎ、日本語支援をする。

担当学生：大学 3 年生 2 名（日本語教育を主専攻とする学生）

支援対象となる子どもたちの背景は多様である。ICH の帰国子女は東南アジアの出身で、教育熱心な家庭で育ったこともあり、基礎学力が高い。彼女はミャンマー語と英語が堪能であるほか、来日当初から日常会話程度の日本語を話すことも出来

た。将来はアメリカの大学への進学を希望している。一方、厳しい環境にある子どもも多い。今年の前期まで、中国籍の男の子を支援していた。この子は小学校 4 年生の時に来日した。日本語が全く話せなかったため、地元の公立小学校でいつも孤立していた。小学校 5 年生の時に日本語支援が始まった。最初は我々と打ち解けられなかったが、徐々に信頼関係ができ、日本語力も向上していった。中学校に進学してからは友だちも増え、日本の暮らしに馴染み始めていた。しかし、今年の 8 月に、家族の都合で急に東京に引っ越した。この子が転居先で孤立していないか心配である。また昨年まで、高校進学を夢見る中国籍の 17 歳男子の支援もしていた。この子は、ご家族が高校進学に反対したために受験を断念し、いまは北海道で働いている。彼は気の良い優しい子だが、日本語をほとんど話せない。日本でこれから暮らしていけるのか、気がかりである。

「外国人教育支援演習」の履修者は、主に日本語教師や小・中学校教諭を目指す学生たちである（1 名は行政職に内定）。彼ら・彼女らは、近い将来、間違いなく外国にルーツのある子どもたちに直面する。この演習は、社会貢献活動の一環であると同時に、こうした学生が多文化共生の実態を学ぶ好機にもなっている。

写真 1　中級コースで学ぶ外国にルーツのある児童・園児たち

注 1）長時間労働に従事する外国人労働者は、生活圏が職場と自宅で完結しがちである。また、日本語が苦手である人も多い。こうしたことから、外国人住民は日本社会になかなか溶けこめず、孤立する傾向にある．こうした状況は「顔の見えない定住化」と表現される。梶田孝道・丹野清人・樋口直人 2005.『顔のみえない定住化』名古屋大学出版会.

注 2）https://www.icc.ac.jp/edu/news/2021/detail/ksbmhp0000008dn1-att/IC_with_U.pdf

Ⅵ 「情報デザイン演習」とコラボレーション
＜情報デザイン演習＞

「情報デザイン演習」とコラボレーション

鈴木晋介

情報デザイン演習ではAdobeの編集ソフトInDesignを使用し、さまざまな広報活動を念頭に置いたチラシ作成や冊子媒体のレイアウト技術を実践的に学んでいる。授業の基本パターンは、①特定の操作技術の教授（たとえば描画やテキストフレーム設定など）、②当該技術を用いた作品づくり、③作品発表会を１セットとし、操作技術の種類を増やしながら５セットまで行う。今年度はAフリーアート作品（お題：春）、B名刺づくり、C学科広報チラシ、D自由記事、Eアクティブ・ラーニング報告書の表紙づくりという５セット５作品に学生たちは挑戦した。本報告書の表紙も毎号この演習で学生が取り組んだ作品の中から、演習内で人気投票を行い上位２作品から学科主任が決定するという仕組みが定着している。

今年度は上記Cの学科広報チラシの作成にも取り組んだ。本学科が主催する留学生とのチャットアワーの学内広報用チラシ作成を私たちが請け負う形で演習内に組み込んだものである。こちらも学生同士の人気投票で選ばれた作品が学内の掲示板やエレベーター内に掲出された（チラシ最下部に小さく「このチラシは情報デザイン演習の学生作品です」といった一文を入れたのはいうまでもない）。ソフト操作に不慣れな初めのうちは難しいが、学生たちの技術習得速度は目覚ましいものがあり、いわば飛び込みの広報制作要請にもかなり柔軟に対応できた。学生たちにとっても身近なところでアウトプットできることは大いに励みになり、公表機会、モチベーション、技術の深化との間の好循環が生まれている。今後も積極的にさまざまな広報活動とコラボレーションしながら演習の魅力を高めていきたいと思っている。最後になるが、今年度も２人のスチューデント・アシスタントに演習運営の協力をお願いした。先輩たちの個別指導や学生作品へのコメントは作品づくりにおける微細な気づきやヒントを受講者たちに与えている。受講者はそれをすぐさま吸収し次の作品に活かす。こちらでも自然と好循環が展開しはじめている。この場を借りて、２人に感謝を伝えたい。ありがとうございました。

＜学生作品の紹介＞
１年生が作成した最優秀作品。レトロなカセットテープやレコードの画像は学生本人が図形を組み合わせ、色合いやグラデーション効果などを調整して一から作り上げたもの。本人いわく「とてつもなく時間がかかった」。そのこだわりの深さに演習の皆は絶句、ただただ賞讃の拍手を送ったのであった。

Active
Learning
Report
2024

Active
Learning
Report
2024

Active
Learning
Report
2024

2024
Active
Learning
report

Active
Learning
Report
アクティブ・ラーニング報告書

2024
Active Learning Report
茨城キリスト教大学
文学部　文化交流学科

Active
Learning
Report 2024

ACTIVE
LEARNING
REPORT

ACTIVE
LEARNING
LEPORT
2024

2024

Ⅶ　学科講演会報告（前期・後期）

2024 年度文化交流学科講演会（前期）の報告

文化交流学科　染谷智幸

2024 年度の分が交流学科講演会（前期）は以下の内容で行われました。

講師：栃尾正俊（Select 代表、2009 年文化交流学科卒業生）
演題：「人の心を掴むには」
日時：2024 年 7 月 11 日(木)　14:20～15：50
場所：シオン館 210 教室

社会で活躍する卒業生の登壇ということもあって、懇話を拝聴した学生たちは、楽しい中にも真剣に話を聞く姿勢が見られ、たいへん充実した講演会になりました。とくに、栃尾氏が Select を起業してから、様々な困難を乗り越えて、現在に至るまでのお話は、人との出会い、そこから得た気付き、そしてチャレンジする勇気の大切さを学生に教えてくださったと思います。

以下、
１）　栃尾氏ご自身によるご報告
２）　栃尾氏のご講演で使われた資料（2 点）
３）　栃尾氏のご講演についての学生の感想（代表的なもの 1 点）
の順番でご報告させていただきます。

■栃尾氏ご自身によるご報告

１）栃尾氏の氏名、会社名、卒業年次

- **氏名**：栃尾 正俊
- **会社名**：Select. (https://m-select.co/)
- **卒業年次**：2009 年 3 月 C 科卒業

２）自己紹介

2021 年 6 月に Select.を起業して現在 4 年目になります。大学在学中に、カメラや映像、多文化に触れ、そこで培った行動力や課題解決力を活かし、卒業後、ウエディングのビデオカメラマンとして 16 年間活動中です。業務では撮影・編集、新規事業開発や企画立案などを行っています。現在は、いくつか事業を立ち上げ、プレイヤーでもありながら、経営も学んでいます。

３）今回の講演の趣旨

今回の講演では、「人の心を掴むには」というテーマで、以下のような趣旨で一年生の皆さんにお話をしました。

1. **キャリア形成のポイント**
    - 大学在学中に身に付けるべきスキルと社会に出てから活きる視点について説明。
2. **自身の実体験をもとにした失敗談と成功談**
    - 社会人になってからの具体的なエピソードを通じて、挑戦することの大切さや逆境を乗り越える方法を紹介。
3. **今後の大学生活で意識してほしいこと**
    - やりたいことを模索する姿勢や、人脈づくり・情報収集の重要性など、学外での経験も含め積極的に動くことの意義を強調。

4）学生の反応とそれへの自分の感想

- **学生の反応**
    - 講演後のアンケートでは、「社会に出てからの具体的なエピソードが参考になった」「これから自分の進路を考えるうえで、大切にすべきポイントが見えてきた」という声が多くありました。
    - 質疑応答では、就職活動だけでなく、大学生活の過ごし方や自身の強みの見つけ方についての質問があり、積極的に将来を考えている様子が伺えました。
- **感想**
    - 映像や写真を使ってお話したので、学生さんたちが飽きずに、真剣に聞いていた姿が印象的でした。
    - 特に「今やりたいことがない」という悩みを持つ学生さんが多い印象を受けましたが、自分の経験や考え方を共有することで、選択肢を増やすお手伝いができたのではないかと思います。
    - 一人だけでもいいから心に響いてほしいという想いを込めて話したのですが、アンケートを見ると、意外とそれぞれの課題解決に繋がっていたのが嬉しかったです。

5）これからのＣ科に望むこと

- **学外との連携強化**
    - 企業との連携やインターンシップ、OB・OG との交流など、実社会と触れ合う機会を積極的に増やしたら、もっと選択肢が増えるのではないかと思いました。
- **学生同士のコラボレーション活性化**
    - 学内プロジェクトや勉強会（講師を呼んで）など、学科を超えたネットワークづくりを支援すると、将来の多様なキャリアに繋がると思います。
- **異文化体験の充実化**
    - 多角的な視野を得られるように、映像の活用や色々な企業に支援して頂き、より柔軟な思考力を育む環境を整えていただくと、もっと文化交流学科が魅力溢れる学科になると感じました。

■栃尾氏のご講演で使われた資料を２点（掲出と解説）

右）栃尾氏の自己紹介用のページです。

下）栃尾氏が経営する Select が作成したビデオクリップなどの作品です。各界で活躍されている方々も積極的に取材・作品化しています。

■栃尾氏のご講演についての学生の感想（代表的なもの１点）

・「心はいつまでも、どこまでも自由」　１年次、K・K

私は今回の講演を聞いて、一つ思った事がある。それは、「大人とは、思っていたよりもずっと自由なのかもしれない」ということだ。無論、年齢を重ねればその分自分の責任やできなくてはならない事柄も増えるだろうが、それと自由であることは別問題なのかもしれないと思ったのだ。

栃尾さん自身が自分の夢の為に様々なことにチャレンジしているのもそうだが、やはり彼が出会った様々な経営者達のぶっ飛んでいるとさえ言える行動の数々を聞いてそう思った。私の中で経営者と言えば、社長室で革張りの椅子に座り、山盛りの書類を読み込んで判を押すイメージが強かった。しかし、話を聞くとどうした事か、何とも自由奔放なエピソードが次々と飛び出してくるではないか。無論、自分の立場に見合った重責を背負っているのだろうが、だからこそ、心はどこまでも自由なのかもしれないと思った。「風の時代」という単語が講演の中で出てきたが、どれだけ年を取ろうとも、他人から見たら滑稽であろうとも、行動することで常に自分の好奇心や童心を枯らさない人こそが、これからの時代における「成功者」であり、同時に、そういうことを続けられる人が、人の心をつかむ一種のカリスマ性を身に着けられるのだと、私は感じた。

以上

2024 年度文学部文化交流学科　後期学科講演会報告

中山健一

日時：2024 年 11 月 14 日（木）14：20〜15：50
場所：茨城キリスト教大学　キアラ館礼拝堂
題目：「多文化社会を語り合う」
講師：グリブ・トルマチョウ（Tolmachov Glib）氏

今年度後期は、現代英語学科との共催で、ウクライナ出身のチェロ奏者、グリブ・トルマチョウ氏をお招きした。氏は、ウクライナ東部ハルキウ市出身で、ハルキウ国立芸術大学を卒業した（音楽芸術修士）。オーケストラ弦楽器専門資格、チェロ高等教育資格をもち、クラシックや現代音楽の多くの演奏会で活動してきた。オーケストラ団員として活動するかたわら、ウクライナの有名なバンドと多数共演した経験をもつ。2023 年 1 月よりつくば市に在住し、日本各地のイベントやコンサートに出演している。

まず、現代英語学科教員で、ウクライナ出身のジャブコ・ユリア先生から、講師の略歴が紹介され、2022 年のロシアによるウクライナ侵攻以降、戦時下にあるウクライナの現状が説明された。続いて、グリブ・トルマチョウ氏が、これまでの音楽活動について、そして、現在の日本での生活について話された。特に、来日前に抱いていた日本のイメージと実際とのギャップの大きさ、文化や習慣の違い、日本語学習において漢字が障壁となることなど、日ごろ外国人に対する日本語教育に従事する私にとって、興味深い話が多かった。本講演会の題目が「語り合う」となっているとおり、本学学生からの質問も多く出、皆、講師の回答を興味深く聞いていた。その後、メインとなるチェロ演奏がおこなわれた。いずれもすばらしい演奏であり、なかには感動のあまり涙を流す参加者もみられた。

以下、当日の写真と、参加した学生の感想の一部を掲載する。

演奏するグリブ・トルマチョウ氏

本学ジャブコ・ユリア先生（右）とともに

＜参加した学生の感想＞　※いずれも、文化交流学科１年生による。一部抜粋。
・ウクライナに家族を残し、日本でのチェリストとしての生活は不安なことばかりだと思うが、前向きに平和を願いながら活動する姿にとても感動した。

・戦争という状況の中でも自身のチェロを信じて毎日弾き続けることは、並大抵の努力ではないと感じた。

・今の私たちがウクライナに対してできることは何かを知り、実践していく必要があると思った。

・今回は普段聞くことのできない貴重なお話を聞くことができてとても良い経験となった。チェロの演奏も目の前で聞く機会はほとんどないので、とても楽しかった。

・一日もはやく戦争の終わったウクライナへ帰国し、家族と再会できることを心から願っている。

・演奏では、戦争のサイレンのような音色を出しており、鳥肌が立った。そのあとは明るい音色でウクライナ人が思っている今後の未来であるように感じた。

・グリブさんの演奏はとても重みがあり、一つの楽器だけで演奏をしているとは思えないほどたくさんの音色があり、もっと聞いていたくなる演奏だった。

・グリブさんのチェロのケースに書いてあった「芸術、それは私の武器」という言葉が、とても心に残った。

・音楽は、異なる背景を持つ人々の心をひとつに繋げることができるものであると感じた。

・これまで、日本語教育などについて学んできたが、どこか遠い存在だと考えてしまっていた。しかし、今回グリブさんのことについて詳しく聞くことができ、どんな気持ちで日本に来たのか、そして、日本にも避難民としてウクライナの方たちが来ていることを知ることができた。

・今までウクライナという国はどこか遠い存在だったが、今回の講演を聞き、ウクライナがより身近な存在になった。

＜謝辞＞
　末筆ながら、今回の講演会実施にあたり、講師のグリブ・トルマチョウ氏、そして、現代英語学科のジャブコ・ユリア先生に、心から感謝申し上げる。

Ⅷ　FD 報告書

2024 年度文学部文化交流学科 FD 報告

文化交流学科主任　中山健一

日時：2025 年 1 月 7 日（火）14：30～16：00
場所：茨城キリスト教大学 11 号館　11202 教室
内容：基礎演習の内容改善に向けて

本年度は、外部講師をお招きせず学科教員のみで、学科 1・2 年生必修科目「基礎演習 I～IV」の内容改善に向けた報告と議論をおこなった。具体的な論点は、次の 2 点である。

① 1 年次から 4 年次にあがっていく縦のつながり

各学年での段階的な学びの過程が、スムーズにつながっているか。また、より適切につなげていくには何が必要か。（下記、図。当日配布資料より抜粋。）

	文化論演習 III、IV	各学年の学びの
↑	さらなる専門的な学びの発展（卒業研究として結実）	有機的な連関
	文化論演習 I、II	
↑	自身が選択した分野の専門的な学び	無理のない
	基礎演習 III、IV	飛躍のない
↑	基礎的な学びの発展、文化論演習 I、II へつなげるための基礎的スキル習得	学びの配置
	基礎演習 I、II	カリキュラムの
↑	学科の学びへの理解、初歩的なスキルの習得 基礎演習 III、IV へのつながり	一貫性

② 同一科目でのクラスどうしの関係

同一科目のそれぞれのクラスにおいて、担当教員の個性や専門性が尊重され反映されるべきだが、各クラスで共通して扱うべき事柄がある。それは何か。（特に「基礎演習 III、IV」。下記、図。当日配布資料より抜粋。）

文化論演習 I～IV
　基礎演習 I～IV で習得したことがらを基盤としつつも、具体的な研究手法は、各分野に委ねられる。教員の専門分野等、各クラスの独自性。
基礎演習 III、IV
　教員の専門分野等、各クラスの独自性がある一方で、
　3 年次にどのゼミを選んでも対応できるような、あらゆる学問に共通する基礎的なスキルを、各クラス共通して習得する必要がある。
基礎演習 I、II
　もっとも基本的なことがら。
　各クラス共通のことがらを習得。クラスどうしの差異はあまりない。
　（全クラス共通シラバス、一部合同授業の実施）

FD では、事前に提出された各「基礎演習」の授業報告書をもとに各担当教員が授業の報告をした。その上で、質疑応答、全体討議をおこなった。

＜1 年次「基礎演習 I、II」＞

内容について、(1)学科の学びの全体像および学科の学びの四本柱（多文化協働、観光、地域貢献、日本語教育）を理解すること、(2)パワーポイントを使って発表すること、(3)文化交流に関する新書を読み要約して、その内容に対する批判的な検証をおこないレポートを執筆することの 3 点などの知識・スキルの習得をめざしていることが報告された。また、今年度から、近年普及しつつある生成 AI との向き合い方を考えさせる授業を盛り込んだことが報告された。

課題として、BYOD（Bring Your Own Device）にかんして、学生に持参させ授業で使用させる電子機器に、どの程度制限をかけるべきかという点が挙げられた（Word、Excel、その他アプリケーションを使いこなせるように、Windows PC に限定すべきかなど）。また、新書要約とレポート執筆において、新書のような平易な文章をまとめる力は身につくが、そこで論じられている社会問題等の背景を理解し、我が事として捉え考えるまでには至っていないのではないかという点が挙げられた。

＜2 年次「基礎演習 III、IV」＞

担当者によって具体的な内容に違いがあるものの、全員共通して、ある程度専門性の高い図書や論文、芸術作品とその解説などの「インプット」を適切に理解する活動、その上で、「インプット」をもとに、自身の調査結果や考えを「アウトプット」として発表やレポートにまとめる活動がなされていることが報告された。特に「基礎演習 III、IV」では担当教員がそれぞれ独自に工夫を凝らしており、「インプット」の内容に大きな違いがあることが興味深かった。

一方で、学生の興味関心、読解力に違いがあるため、クラス間で「インプット」の内容をどれくらい揃えるべきか、レベルをどれくらい合わせるべきかは難しい問題で、今後も継続して検討すべき課題である。その他、議論に消極的な学生を巻き込んだグループワークの方法や、未知の事柄を探索する楽しさ／難しさ／奥深さをどう伝えるかなどが議論された。

＜全体に関わること＞

最後に、これは「基礎演習」のみに限らないが、全学生に共通する学科の学びの終着点は何かという問いが挙げられた。文化交流学科は特定の専門職につく学生を教育する学科ではないので、難しい問いである。そもそも「文化交流」とは具体的には何かという問いに等しく、今後、議論を重ねていく必要がある。

むろん、今回 1 回限りの議論で解説策・答えを見いだすことはできないので、今後も同様の場を設け、議論を続ける予定である。

『アクティブ・ラーニング報告書』は、茨城キリスト教大学文学部文化交流学科の出版物です。
Active Learning Report is published by Department of Cross- Cultural Studies, College of Literature, Ibaraki Christian University.

2024年度 文化交流学科

アクティブ・ラーニング報告書

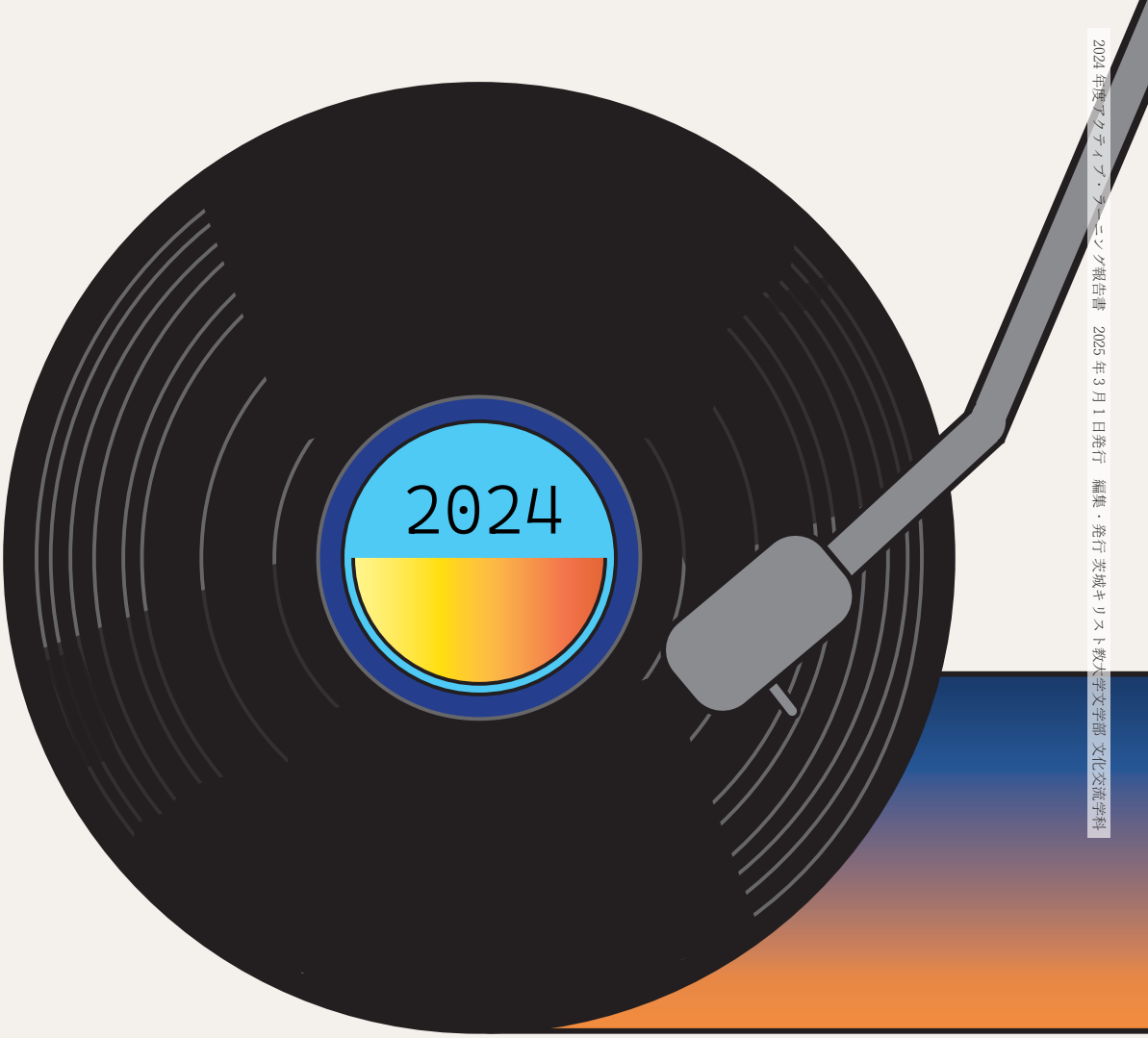
2025年 3 月 1 日発行

©2025, Department of Cross-Cultural Studies, College of Literature, Ibaraki Christian University

発行 茨城キリスト教大学文学部文化交流学科
〒319-1295 茨城県日立市大みか町 6-11-1
電話 0294-52-3215（代表）

編集 勝山 紘子
表紙デザイン 板垣 美涼（文化交流学科 1 年）

2024年度アクティブ・ラーニング報告書　2025年3月1日発行　編集・発行 茨城キリスト教大学文学部 文化交流学科



茨城キリスト教大学

文学部

文化交流学科